

「鮭の聖地」の物語

根室海峡
一万年の道程



コンセプトBOOK

目次

Story I

2 野付半島の先にあった、世界への入り口
エピソード1
6 根室海峡のオホーツク文化
エピソード2
7 幻のまちキラク

Story II

8 鮭でつながり合う北方古代文化の人々
エピソード3
13 タブ山チャシ跡

Story III

14 メナシの地で、会津藩士が灯した産業の光
エピソード4
19 標津神社とクナシリ・メナシの戦い
エピソード5
20 ラクスマンと高田屋嘉兵衛にみる初期の日口交渉史
エピソード6
21 開拓使別海岱詰所物語

Story IV

22 海に、大地に、人々の挑戦は続く
エピソード7
26 野付湾の打瀬網漁と根室海峡のカニ缶詰
エピソード8
27 根室地方の昆布生産のルーツと地域芸能
エピソード9
28 標津線関連資産群
エピソード10
29 根釧台地の格子状防風林

Story V

30 いまも鮭は暮らしとともに

32 アイヌ語地名から考える「鮭の聖地」

36 年表



ここがメナシと呼ばれる遙か以前より、この地は鮭の大地でした。
大地に発して海をめぐり、生まれた大地に還ってくる――
自然の摂理によって鮭は根室海峡沿岸のあらゆる生命を支えてきました。
鮭の存在は、人々の衝突や共生、幾多の物語を紡ぎ、
そして川に、海に、陸に、路をつくりだしてきました。
「鮭の聖地」の物語はこれからも未来へとつながっていきます。

海峡に浮かぶ東への門・
野付半島

北海道最東端の根室海峡に突き出す日本最大の砂嘴・野付半島。根室海峡の速い海流によって、長い年月にわたり砂や小石の堆積と海水の侵食を繰り返して、まるで釣り針のような独特の形状を作り上げた。海水の侵食はトドマツやミスナラが立ち枯れたトドワラ、ナラワラの幻想的で荒涼とした風景を生み、東の果ての地という雰囲気を感じさせている。

目前には、千島列島に連なる国後島が横たわる。その距離は意外と近く、16 kmほどしかない。野付半島は古来、海峡を挟んで向かい合う北海道の本土側と島側の結節点だった。古代から江戸時代に至る遺跡や史料から見えてくるのは、野付半島を

への中継点として幕府によって設置された野付通行屋跡が残る。野付半島から北は水深が浅いため、ここで渡海用の舟に乗り替えていた。支配人が常駐し、島へ渡る人々のための宿泊施設や蔵などもあったという。この地に「キラク」という歓楽街があったとされる伝説もあるが、近年の調査から、野付通行屋跡と周辺の鯺番屋跡のことではないかと考えられている。

野付半島の先、国後島と択捉島から千島列島にかけては、古くからアイヌの人々の重要な交易ルートだった。根室海峡沿岸の国後島に面した地域一帯は東方を指す「メナシ」と呼ばれており、メナシのアイヌは松前(和人地)からの漆器や絹布・綿布・鉄鍋などを、千島アイヌのラッコ毛皮・鷺羽などと交換していた。千島側からのこ

Story | I

野付半島の先にあった、 世界への入り口



野付半島先端付近にある墓。「幻のまちキラク伝説」のモデルとなった野付通行屋があった当時のもの。

經由して人とモノが激しく行き交い、文化を共有していたことだ。国後島からさらに東の択捉島、千島列島へとつながり、その先にあるのは背後にロシアの大陸が控えるカムチャツカ半島だ。

野付半島は東に向かって開かれた「門」であり、広い世界への入り口だった。それは現在の荒涼とした風景からは想像もできないほど、歴史の激しい変化にさらされた地だったことを物語っている。そして根室海峡沿岸地域最大の産物である鮭も、時代とともに役割を変えながら、歴史の一端を担ってきた。

千島列島とつながる
メナシの地

野付半島の先端部には、1799(寛政11)年、国後島

うした品は「軽物」と呼ばれ、和人社会で大変珍重されたため、蝦夷地の交易品が藩の財政を支えていた松前藩にとって重要だった。1783(天明3)年に著された『赤蝦夷風説考』には、「蝦夷の東北の末の海上に千嶋と名付く嶋々大小あり。この嶋つゞきより折々交易する事、昔より有之由」とあり、千島からの交易品のなかには、から鮭(干鮭)も見える。アイヌとの交易の独占権を持っていた松前藩は、商場知行制(上級藩士による交易)によってロシアや北千島の産物を手に入れていた。のちに国後島にも商場としてクナシリ場所を設置している。

その後、場所請負制(商人が交易を請け負う)へ変わると、メナシの地・キイタツプ場所と

野付半島の中ほどに広がる「ナラワラ」。ミズナラなどの樹木が海水に浸食され、立ち枯れたまま林を形成している。



クナシリ場所を請け負った飛騨屋久兵衛は、ニシベツ（現在の本別海）の西別川に大量にのぼる鮭で塩引きを製造。1786（天明6）年、幕府が試験的に場所経営を行った御試交易の際には5万4千本を作り、船で江戸や松前へ運んだという記録もある。

しかし1789（寛政元）年、飛騨屋の場所の支配人から非道な扱いを受けていたアイヌの人々が蜂起し「クナシリ・メナシの戦い」が起こった。背景には、鮭のしめ粕づくりという重労働を強制的に課せられ、冬の保存食の干鮭などが作れず、アイヌ自身の暮らしがままならなくなったことがある。鮭をめぐる出来事からは、交易の媒介者から一介の労働者へと変えられていったアイヌの人々の姿が見えてくる。

千島列島の開発と野付通行屋

18世紀末は、メナシの地にとって激動の時代といえるだろう。千島列島ではラッコ毛皮を求めてロシアが南下を始め、北千島のアイヌの人々のロシア化が進んでいた。さらに外国船が頻繁に蝦夷地へ来航することにも危機感を覚えた幕府は、1799（寛政11）年から7年間、東蝦夷地（太平洋側）を直轄。幕府の直接経営で交易を行うと同時に、千島列島の開発を図り択捉島までを領土とした。野付半島に通行屋が設置されたのは、まさにこの時代。根室海峡沿岸は、蝦夷地本土における対ロシアの最前線であり、野付半島は千島列島への足がかりとなった。

前年の1798（寛政10）年、

大規模な蝦夷地調査で訪れた役人の近藤重蔵は、千島列島調査の際、択捉島に「大日本恵登呂府（エトロフ）」の標柱を建て領土であることを宣言する。その帰り、野付に宿泊したことが従者の日記から分かっている。1800（寛政12）年、重蔵は蝦夷取締役御用としてエトロフ掛を命ぜられると、千島列島を念入りに調査し、地図を作成した。それが、蝦夷地からサハリン、千島列島、カムチャツカ半島までの地名が克明に記された「蝦夷地図式乾坤」である。また、廻船業者の高田屋嘉兵衛とともに国後島との間の択捉航路を開発。その後高田屋嘉兵衛は択捉島に漁場を開き、根室、国後、択捉を拠点とする場所請負人となった。

時代はくだって1858（安

政5）年、6度目の蝦夷地踏査を行っていた北方探検家・松浦武四郎が野付通行屋を訪れている。当時、通詞（アイヌ語通訳）として在住していた加賀伝蔵を高く評価し、江戸に戻ってから自身の著書や地図を贈るなど交流が続いていた。そして「鮭の筋子を今年も一樽送ってほしい」と手紙で懇願している。武四郎は、標津川など根室海峡沿岸の鮭の価値をよく知っていた。野付半島は、交易の入り口から防衛と開発の入り口へと変化しながら、海峡をへだてた、向こう側へ絶えず人々を導いてきた。こうした野付半島の役割は、古代北方文化の時代から連綿と続いてきたことが分かっている。そして、海峡を越えた人々の動きを支えたのは、当地の自然と人と、あらゆるものの糧となった鮭だった。

幻のまちキラク



野付通行屋跡遺跡（1999年撮影）

知床半島と根室半島のちょうど中間あたりに、地図上で見ると釣り針のような形をした全長28km、日本最大の砂嘴、野付半島がある。ドドワラ・ナラワラの特異な景観、水と緑と野生鳥獣、湾内に生息するホッカイシマエビの打瀬舟漁などの風景は多くの観光客を魅了している。

今でこそ荒涼としたこの半島に、かつては人々の喧騒が存在したという言い伝えが残っている。昭和39（1964）年に北海道大学探検部が行った調査報告書によると、「地元の人々にキラク町と呼ばれている場所ある。キラクの由来は気が楽になるところと言う意味で、この附近の人々のための歓楽の場があったことに由来するらしい」と記載されている。

野付が文献に現れる記録として、『津軽一統誌』（寛文10年）がある。その22、3年前の記録として、「みむろよりのしけ着。是よりらっこ島くなしりへわたり申候」、野付崎から国後島へ渡っていたことを示すものである。寛政10（1798）年、択捉島に「大日本恵登呂府」の木碑を建てた近藤重蔵の一行も帰路野付に渡っており、この時、ニシベツ（別海町本別海）や標津から働きにくる人々の漁番屋が多く野付にあったと記録している。

寛政11（1799）年に蝦夷地を直轄した幕府は、陸路・海路の整備を急務とし、野付には国後島へ渡るための中継点として野付通行屋が設置された。通行屋のほかに蔵などもあ

り、ロシア南下に備えて警備した武士もいたようである。通行屋には、支配人（番人）がいて、妻同伴で仕事をし、ほかにアイヌが8ほど詰めていた。渡海用の船が用意しており、賃銭も決まっていた。「加賀家文書」のほとんどを書き残した加賀伝蔵は、安政年間頃（1854～1859）支配人を勤めている。国後島へ渡海する武士たち、箱館奉行の蝦夷地巡回一行、蝦夷地を探検していた松浦武四郎、種痘のために江戸から来た医師、商人の世話など数々の業務をこなし、アイヌの人々と畑を拓いていたことなどを記録に残している。

野付通行屋の南側にあたる外海は鯨漁場で、春になると根室場所の各番屋から人々が集まり漁に従事した。漁番屋や蔵などを建て、50～60軒前後の建物が立ち並んでいたようである。

人々の言い伝えによって「キラク」と呼ばれている場所は、平成15（2003）年～17（2005）年に別海町教育委員会により発掘調査が行われ野付通行屋跡と確証を得ている。鯨漁の漁番屋も漁業施設と思われる遺構や生活用品などの遺物から野付番屋跡の存在を裏付けるものである。

このように文献資料には「キラク」についての記録はなく、地元の人々によって語り継がれている言い伝えということでは、説明ができない。現段階では、こういった経緯が幻の所以というところであろうか。

根室海峡の オホーツク文化



根室海峡沿岸の遺跡からは北方古代文化にまつわる多くの出土品が発掘されている（松法川北岸遺跡で見つかったオホーツク文化の出土品）

根室地方では6世紀から9世紀にかけて、北海道独特の古代文化であるオホーツク文化が発達しました。その文化の内容には大陸の影響も認められ、日本列島各地で確認されているあらゆる時代の文化と比べても異彩を放っています。

オホーツク文化を担った人々は海洋での航海術に長けていたとみられ、その分布範囲はオホーツク海沿岸に沿って、サハリン南部周辺から北海道の海岸部に広がっていました。令和元年9月に根室市で講演した国文学者の中西進氏は、北からのオホーツク文化の広がりにはあたかも流水の広がりと同様のため、この文化の流れを「セーリング・アイス（流水）ロード」とも表現しています。

最盛期である6～7世紀には、根室地方からおよそ1,000km離れた千島列島最北の占守島にまで活動範囲を広げており、根室地方のオホーツク人は、千島列島に文化を拡散する原動力になったと考えられます。彼らの文化は、海獣狩猟や漁撈を中心とした暮らしであったことが、遺跡から出土する資料からわかります。根室市弁天島貝塚堅穴群から出土したオホーツク人の捕鯨の様子が線刻された針入は、オホーツク人の海獣狩猟の様子を写実的に表しています。また海獣骨を利用し、クマ、フクロウ、アザラシなどをかたどった彫刻品も出土しており、動物への特別な思い入れを表しています。

羅臼町松法川北岸遺跡からは、通常は腐って失われる木製品もみつかっています。みつかった木製品の中には「熊頭注口木製槽」という容器があります。これは容器の一端に熊の頭が彫刻されており、口は貫通孔で注ぎ口となっています。そして容器の口縁に沿ってシャチの背びれが彫刻されています。容器を伏せているときは熊の頭が正しく向き、容器を使用するときはシャチが正しく向きます。熊の頭は非常に精巧で吻部にあるくぼみまで忠実に彫刻されています。後のアイヌ文化では、熊は山の神キムンカムイ、シャチは沖の神レブンカムイとされており、オホーツク文化の精神文化がアイヌ文化に影響を与えていることを知ることができる資料としても貴重です。

世界自然遺産知床の羅臼町は、現在も熊頭注口木製槽にある熊の存在を身近に感じられるところであり、また観光船によるホエールウォッチングではシャチを近くに見ることができます。そして知床半島先端部には、当時を今に伝える自然景観が残されています。



海洋狩猟民として根室海峡を往来したオホーツク文化を伝える出土品（根室市弁天島遺跡から）

鮭でつながり合う 北方古代文化の人々

「標津遺跡群」の豎穴跡。1万年に及ぶ人々の暮らしの証。ポー川流域に広がる遺跡は、洪水対策のためか多くが川面から15メートルほどの高台にある

一大豎穴群が残る地・標津町

野付半島から根室海峡沿いに少し北上した、知床半島の付け根にあたるまちが標津町だ。基幹産業である漁業のなかでも秋鮭漁はかつて全国有数の水揚げ量を誇り、「鮭」のまちとして知られている。

根室海峡沿岸には鮭が遡上する川が幾筋も流れているが、なかでも、はるか昔から鮭を求めて多くの人々が集まったのが現在の標津町だ。町内には約1万年前の縄文時代から途切れる



ことなく人々が暮らした豎穴住居跡が、川の流域を中心に約4400見つかっている。寒

冷な気候が有機物の分解を遅らせ、豎穴のくぼみが埋まらずに形が保たれて、日本最大の豎穴群「標津遺跡群」として残された。

この遺跡の顕著な特徴は、どの時代の豎穴跡からも多くの鮭の骨が見つかっていることだ。鮭の利用を重視した暮らしが、1万年近くにわたって標津の地で続いたことを雄弁に物語っている。

鮭の骨が7割の縄文遺跡

標津町ポー川史跡自然公園内にある国指定史跡「伊茶仁カリカリウス遺跡」は、標津遺跡群の中心的な遺跡だ。標津湿原の奥の、小高くなった段丘上の森の中に縄文から擦文の豎穴住居跡がくぼみとなって残っている。その数は確認できるものだけで約2500と、見つかった豎穴跡の半分以上がここに集中している。公園内ではその一部分を見ることができ

る。伊茶仁とはアイヌ語でイチヤ

ン（鮭が産卵するところ）が由来とされる。遺跡のある段丘に沿って流れるポー川は、根室海峡に注ぐ伊茶仁川の支流で、遡上した鮭の産卵に適した場所だった。縄文文化の豎穴跡などからは、約6千年前の縄文前期から中期、晩期、そして続縄文

時代以降の豎穴からもサケ科魚類の骨が出土している。標津遺跡群の中の縄文文化期の遺跡の調査では、出土した食料の遺物の約7割をサケ科の魚が占めていた。

ほかの縄文遺跡では様々な食べ物のごく一部として鮭が出る

ことはあるが、鮭主体で見つけることは少ない。同じように鮭をおもな食料としていた、札幌など石狩川下流域では5割ほどなので、標津が突出して多いことがわかる。

近年、約500年前のアイヌ文化期の遺跡から出土したサケ科魚類の骨に対してDNA分析を行い種の判別を行ったところ、ほとんどがシロザケだと分かり、秋に遡上する鮭を捕っていたことが明確になった。しかし、アメマスやサクラマスなど春から夏にいるサケ科の魚は不思議と見つからない。なぜ秋以外の季節には捕らなかつたのか疑問だが、シロザケばかりなのは、秋の鮭漁の時だけ標津に人が集まっていたからではないかと考えられている。

根室海峡沿岸の根室や羅臼などのまちにも、それぞれ多くの



(右) 公園内に再現されているトビニタイ文化の住居。オホーツク文化を受け継いだものであることを考慮し、樹皮葺きの屋根としている
(左) 「標津遺跡群」では今もアイヌの大切な場所として先祖供養の儀式が行われている





明治期の標津村・チセの前のアイヌ（北海道大学付属図書館所蔵）



遺跡周辺にはきれいな伏流水が湧き出る場所が80カ所以上あり、飲料水の確保とともに、ここに遡上する鮭も人々の暮らしを支える大切な資源だった

遺跡があるが、鮭の出土はそれほど多くはない。鮭が豊富にいたはずの地域でありながら、ほかの遺跡周辺ではあまり捕っていないかったと考えられる。根室海峡沿岸の人々は、秋は標津へ移動して鮭漁のための集落をつくったのだろうか。捕った鮭は保存食として皆で干鮭に加工したのかも知れない。鮭の時期が終わると、別の獲物の拠点へ移動し集落をつくる…そんなふうには、季節ごとに拠点を換えながら、根室海峡沿岸をひとつのフィールドとする暮らしがあった可能性が見えてくる。

海獣から鮭中心の暮らしへ

サケ科魚類の骨は、伊茶仁カリカリウス遺跡の、10世紀初めのトビニタイ文化の竪穴跡からも大量に見つかっている。「ト

ビニタイ文化」とは、根室海峡一帯にあった、地域性の高い文化のことだ。オホーツク海沿岸や千島列島には、5世紀ごろ大陸から渡ってきた人々によるオホーツク文化が広がっていた。それが、石狩川を中心とする石狩低地帯から北海道全域に広がっていた擦文文化と接触し、10世紀ごろにトビニタイ文化として花開く。トビニタイ文化の集落跡が見つかっているのは、現在のところ標津と羅臼、そして対岸の国後島と択捉島に限られている。少なくともこの範囲は彼らの活動範囲だったと考えられる。

伊茶仁カリカリウス遺跡には、クジラやアザラシなど海獣を主体としたオホーツク文化の暮らしから、擦文文化と同じ鮭・鱒を主体とした暮らしへ変わりつつあった直後の竪穴跡が多数

見られる。大量に出土したサケ科魚類の骨は、文化の変わり目の証しとして重要な意味を持つ。

トビニタイの人々は、命と暮らしを支えるものとして鮭を選んだ。種の判定が終わっていないためシロザケかどうかはまだわかっていないが、そうだった場合は、大規模な秋の集落という可能性もある。きつと対岸の島々の集落からも人々がやってきたに違いない。干鮭にし、冬の保存食として、また質の良い標津の鮭は近隣の人々との交流も促したと思われる。

その後、トビニタイ文化は擦文文化に吸収されたと考えられているが、その過程はよくわかっていない。擦文時代の竪穴は国後島や経由地と考えられる野付半島にも見られることから、根室海峡一帯はずっと、鮭

でつながるひとつの文化圏だったのだろう。さらにこの範囲は、のちにメナシと呼ばれる地に生きたアイヌの人々とも重なってくる。明らかになっていない擦文時代からアイヌ文化成立までの過程のヒントが、ここに隠されているのかもしれない。

地域性を継承した 海峡のネットワーク

標津の市街地から別海町方面へ向かう途中、野付半島方面への道との分岐点に、こんもりとした丘が横たわる。ここは「タプ山チャシ跡」で、丘の上にはチャシというアイヌ文化期の遺跡がある。チャシは北海道全域にあり、周囲を溝で囲った戦いの砦や城とされることが多いが、本来は聖域として築かれたのが始まりとされている。そし

タブ山チャシ跡



タブ山チャシ跡から国後島を望む

根室海峡沿岸を走る国道244号線から、野付半島に向かう道道950号線に入るとすぐに、右手に小高い丘がみえます。この丘の上に、タブ山チャシ跡があります。このチャシ跡は、野付湾に注ぐ茶志骨川河口に築かれたもので、野付半島以北の海峡沿岸一帯を一望できる場所にあります。

チャシは、その時々で使われ方が変わっても、神聖な場としての本源的な役割は、一貫して備わっていたと考えられています。

チャシ跡は、江戸時代のころに「東蝦夷地」と呼ばれた北海道の太平洋側地域に多く分布しています。その立地をみると、胆振、日高、十勝地方では、河川の中・上流域の支流との合流点付近など、内陸部に多く築かれています。一方、根室地域では海岸線に沿った河川河口付近に多く築かれています。根室地域におけるチャシ跡の立地は、河川河口を湊とするコタンの存在を意味するものであり、根室海峡を通じた交流網が築かれていたことが推測されます。

タブ山チャシ跡には、壕で区画された4カ所の郭が残されています。未だ発掘調査されていないため、正確な年代はわかりませんが、これらの郭がそれぞれ別の時代に築かれたものだとすると、長期にわたってこの場所がチャシとして利用され続けたことの証となります。

チャシ跡に登り、標津市街方向に目を向け

ると、2基の鉄塔が見えます。手前の鉄塔付近にはホニコイチャシ跡が、奥の鉄塔付近には望が丘チャシ跡が存在します。このうち、望が丘チャシ跡とタブ山チャシ跡の間には、江戸時代に記録された、アイヌ同士の戦いの物語が伝えられています。



加賀家文書に残るアイヌ同士の戦いの一場面を描いた絵図。裸の女性を茶志骨川に走らせ、タブ山チャシに陣取った人々が気を取られている間に、後方から急襲したとされる

また、タブ山チャシ跡から見渡せる景観は、東に野付半島、東北東に国後島、北に知床連山の山並み、北西に標津市街を望み、根室海峡北部一帯を一望できるパノラマが広がっています。この視界の範囲で、かつて幕府をも巻き込む騒動となった事件、クナシリ・メナシの戦いや、日本とロシアの衝突と交流のエピソードとして伝えられる、高田屋嘉兵衛の拿捕事件が起きるなど、日本列島北方史上重要な、数々の事件が起きたのです。

根室海峡に流れ込む川の河口付近にはチャシ跡が多く残されている。上は「タブ山チャシ跡」(標津町)、下は「ヲンネモトチャシ跡」(根室市)。チャシはアイヌコタンの神聖な場所としてつくられたのが始まりとされ、時代とともに談判の場や鮭の資源監視場、そして戦いの砦として、役割を変化させてきた。



て、時代とともにさまざまな機能を持つ場になったと考えられている。そのひとつが交通の結節点に設けられた「道しるべ」としての役割だ。北海道のチャシの多くは河川の中流・上流域に築かれていることが多い。川は、アイヌの人々にとって道であり、流域に残るチャシ跡の存

在は、河川を通じたネットワークを発達させていたことを物語っている。一方、タブ山チャシをはじめとする根室海峡沿岸のチャシは、河口を見下ろせる場所に築かれていることが特徴だ。この地域では、河口を湊とする集落を築き、海を通じたネットワークを発達させていたことがうかがえる。タブ

山チャシ跡の前を流れる茶志骨川は野付湾へと注ぎ、野付湾から外洋へは、川と海のあいだの狭い陸地に舟をあげて運べば簡単に移動することができた。松浦武四郎の『東蝦夷日誌』には、その場所は「チプルー(舟の道)」という地名で呼ばれていたとある。対岸の国後島のチャシ跡も、同じく河口にあるという。古来の鮭を媒介にした文化圏を引き継ぎ、根室海峡を通じたネットワークが培われ、メナシという地域性のあるアイヌ文化がここに始まっていたのだ。

タブ山チャシ跡に立つと、根室海峡北部を一望できる。国後島の島影もすぐそこだ。海を中心とする広い世界をひとつのものとした時代の人々は、この景色をどんな思いで眺めたのだろう。

メナシの地で、会津藩士が灯した産業の光



屏風絵に描かれた
会津藩の標津

一隻の屏風に描かれた、小舟が連なる大きな川と、そのほとりて忙しそうに働くアイヌの人々。小舟に満載しているのは鮭で、舟から降ろされた鮭は背負い籠で小屋へ運ばれていく。小屋では塩をまぶした鮭を山のように積み上げて水分を抜き、じっくり熟成させた鮭の加工品「山漬け」が作られている。

この「標津番屋屏風」が描かれた1864(元治元)年、根室海峡沿岸のメナシの地は会津藩の領地だった。屏風絵が描かれるまでの背景を追ってみよう。

18世紀、松前藩の交易の範囲

は、千島列島に連なる国後島、さらに択捉島まで拡大した。本州向けの蝦夷地産物として、それまでのラッコ毛皮や鷲羽などの軽物に加え、鮭・鱒などの肥料用のしめ粕や、塩鮭・塩鱒が重要な品となる。これらはアイヌの人々を酷使して生産され、1789(寛政元)年のアイヌの蜂起「クナシリ・メナシの戦い」のきっかけとなった。

同じころ、ロシアがラッコ毛皮を求めて千島列島を南下し、択捉島の手前のウルップ島まで達する。18世紀後半にはロシア船がたて続けに蝦夷地へ来航した。根室を訪れた使節ラクスマ

ンは、日本との通商を申し出る。19世紀に入ると、使節レザノフが長崎を訪れ通商を求めた。しかし、幕府が拒絶したことで択捉島の会所(交易の拠点)がロシア海軍士官から襲撃される。

さらに、ロシア海軍のゴローウニンらが極東沿岸調査の途中、国後島に上陸。拿捕したところ、報復として根室場所請負人の高田屋嘉兵衛が野付半島沖でロシアに拉致される事件も起こった。

会津藩がこだわった 「メナシの鮭」

根室海峡や千島列島でロシアとの接触や衝突が増すなか、1855(安政2)年、日露通好条約が締結される。択捉島とウルップ島間に国境が定められると、蝦夷地の大部分を幕府が直轄。その後、東北諸藩に蝦夷

地を分割して領地として与え、国境の北方警備と領地の開拓を命じた。

会津藩の蝦夷地統治は1860(万延元)年から始まった。会津藩の領地は、松前藩の商場だった根室場所のうち、西別(現在の別海町本別海)から知床半島までと、網走を除く道北の紋別にいたる範囲である。いわば国境への最前線に配置された会津藩は、拠点を標津に定め本陣を置く。標津が国後島に

【標津番屋屏風】

南摩が蝦夷地代官となった文久2(1862)年は、藩主松平容保公が京都守護職に任ぜられ、藩兵千人を引き連れて京都入りした年でもあった。藩の一大事に遠く離れた北の地に赴かなければならないことは、南摩に深い失意をもたらした。しかし標津で、鮭の群れと造船にも適したミズナラなど良質な資源を目にした南摩は、欧米列強の脅威に対抗していく構想を描き始める。その構想を絵に表し、当時京都にあった藩主容保公に伝えるために誕生したのが標津番屋屏風。



野付半島にある「会津藩士の墓」。慶応4(1868)年、戊辰戦争が始まり、標津の会津藩士達の多くは郷里へと戻り、会津戦争に臨んだ。



伝蔵が持っていたアイヌ語の辞書『蝦夷方言藻汐草（もしおぐさ）』。通詞・上原熊次郎が1804（文化元）年に刊行した同書を写し、自分用に作製したもの（加賀家文書館 所蔵）



伝蔵が根室場所の通詞だったところにアイヌの風俗を描いた『蝦夷物語』（加賀家文書館 所蔵）



加賀伝蔵（加賀家文書館所蔵）

幕末にアイヌ語通訳として活動し、後に標津場所支配人となった加賀屋伝蔵は、当時の根室海峡沿岸を知る貴重な資料「加賀家文書」を後世に残した。別海町郷土資料館の附属施設「加賀家文書館」には北海道の名付け親・松浦武四郎が当地の筋子を所望した手紙や、江戸時代のブランド鮭を紹介した絵図を見ることができる。

一番近い集落だったこともあるだろうが、もうひとつの大きな理由は、川にあった。先の屏風絵に描かれているのは標津川だ。北方警備を命じられたころの会津藩は財政が苦しく、秋に群れをなして川をのぼる鮭は、会津藩にとって宝の山だったのだ。標津の初代代官を務めた会津藩士・一ノ瀬紀一郎が著した『北辺要話』には、「寒所（メナシ）領に産する鮭は毎（ことごと）く江戸に運漕す」とあり、姿形がとても美しく、他所のものよりも高価だからだと記されている。当時のブランド鮭を紹介した『鱒形図拾壹品鮭形図四品』に記された、メナシの鮭の価値を会津藩は知っていた。根室場所は仙台藩と領地を分け合ったが、献上鮭で知られた西別川が会津藩領に入るよう境界を定めたという推測もある。

会津藩は当初から鮭を藩の経営基盤として重視し、陣屋建設とともにシベツ（標津）場所での鮭の漁場経営にあたった。屏風絵は、その当時の様子がわかる数少ない史料のひとつである。松浦武四郎と交流した会津藩士たち
なぜ、会津藩は前もってメナシの鮭の価値を知り、活用することができたのだろうか。鍵を握るのが、北方探検家であり海防問題の専門家だった松浦武四郎である。一ノ瀬は会津藩の蝦夷地分割統治の前年、武四郎のもとを訪れているので、このとき鮭の情報を得たのかもしれない。もう一人、武四郎と交流があったのが、標津の2代目代官となる会津藩士・南摩綱紀である。南摩はアメリカの黒船（ペ

リー艦隊）に衝撃を受け、国防上、西洋の新しい知識を取り入れる必要性を感じ、会津藩士で初めて洋学を学んだ人物だ。武四郎のもとを頻繁に訪れ蝦夷地について知見を得ており、代官として標津へ赴任する際にも、武四郎から情報をもたらしていたはずである。そして、蝦夷通詞（アイヌ語通訳）・加賀伝蔵の存在も大きい。武四郎は野付通行屋で働いていた伝蔵と出会い、アイヌの人々とともにあろうとするその姿勢を高く評価していた。一ノ瀬と南摩は、蝦夷地での経営に欠くべからざる人材として、武四郎から伝蔵のことを聞いていたに違いない。

加賀伝蔵は、15歳で秋田から蝦夷地に渡ってクスリ（釧路）場所の飯炊きとして働き、アイヌの人々と親しくするなかで構想したのが、水産業を基軸とした領地をつくることだった。従来のようにアイヌの人々を単なる労働力として搾取し酷使するのではなく、和人と同様に自領の民として扱い、ともに領地を開拓しようとしたのである。そのためには、伝蔵のような人材がどうしても必要だった。「標津番屋屏風」には、南摩と伝蔵と思われる人物も描かれている。彼らの視線の先の活気ある様子は、鮭を中心とした産業が築かれつつあったことを感じさせる。現在につながる「鮭のまち」の原型は、このとき出来上がっていたのだ。結局、1868（慶応4）年に戊辰戦争が起こり、江戸幕府が終焉を迎え、南摩の構想が実現されることはなかった。しかし、時代が明治に変わり、蝦夷地が北海道になった時、新たな産業の芽吹

でアイヌ語を習得し通詞となる。さらに、アイヌ文化も深く理解していた。初代代官の一ノ瀬は「大通詞」の称号を与え、その2年後に赴任した南摩は経営トップの「シベツ場所支配人」に抜てきして、伝蔵を重用した。

南摩綱紀と加賀伝蔵の「鮭のまち」

南摩が代官となった1862（文久2）年は、会津藩主・松平容保が幕府に京都守護職を任命され、京都入りした年だった。藩の財政が逼迫するなか、同時に北方警備にもあたらなければならなかった時に、南摩は新領地で豊富な資源を目にする。とくに鮭という水産資源に、海をまた持たなかった藩として今までにない可能性を見たのだろう。そこで、アイヌ語を習得し通詞となる。さらに、アイヌ文化も深く理解していた。初代代官の一ノ瀬は「大通詞」の称号を与え、その2年後に赴任した南摩は経営トップの「シベツ場所支配人」に抜てきして、伝蔵を重用した。

標津神社と クナシリ・メナシの 戦い



根室地域最古の創祀である標津神社は、今も標津番屋屏風に描かれた場所にある

根室地域でのアイヌと和人の関わりは、江戸時代中期の元禄14（1701）年、松前藩が霧多布に商場を開いて以来、次第に強くなっていきました。安永2（1773）年、松前藩が借金返済の代わりに、エトモ、アッケシ、キイタツ、クナシリの4場所での経営権を飛騨屋久兵衛に委譲すると、根室地域での本格的な漁場開発がはじまります。この飛騨屋によって、天明年間（1781～1789）に創祀された漁場の社を起源とするのが、現在の標津神社です。

飛騨屋は松前藩への借金による損失を取り戻すため、当時最新の漁法であった大網漁を導入し、現地のアイヌを労働力に投入することで、生産効率の高い漁場経営を行います。しかしこの時のアイヌに対する扱いは、極めて過酷なものでした。アイヌの冬場の保存食となる鮭まで商品のメ粕原料にして餓死者を出す、妊婦のアイヌ女性を釜に投げ入れようとする、働きの悪いアイヌを薪で打ちつけて殺害するなど、漁場番人らによるアイヌへの非道横暴が、日常的に行われていたのです。この扱いに耐えかねたアイヌの若手リーダーたちが、寛政元（1789）年、武力蜂起します。クナシリ・メナシの戦いと呼ばれるこの事件では、130名のアイヌが蜂起し、国後島と当時メナシと呼ばれた現在の標津町域の漁場の番人ら71名が殺害されています。事件を受け、松前藩は軍隊を根室に派遣し、根室地域のアイヌらも、累々のチャンを築いて迎え撃つ準備を進めていましたが、アイヌと松前藩の軍隊が直接武力衝突することはありませんでした。松前藩が到着する前に、道東のアイヌ有力者12名により事件は収められ、蜂起したアイヌらは根室のノッカマップに集められていたからです。松前藩の根室到着後、事件を主導した若手リーダー39名が、根室のノッカマップで処刑され、事件は収束します。この戦いを収めたアイヌ有力者12名は、その功績を称えられ、松前藩家老で絵師の蠣崎波響により『夷酋列像』と呼ばれる肖像画に描かれました。

クナシリ・メナシの戦いは、「戦い」といながらも直接的な武力衝突には至っていません。これは、『夷酋列像』に描かれた12名のアイヌが、松前藩に味方したからだといわれています。しかしその背景には、アイヌと松前藩の軍隊が直接衝突し、根室地域のアイヌが根絶やしにされることを避けるため、あえて事件を収めようという思いがあったのではないかともいわれています。事件収束の背景に何があったのか、その本当の理由は定かではありません。しかしこの事件をきっかけに、当時外国とみなされてきた蝦夷地は、次第に日本の「内」に組み入れられていくことになります。北海道の東辺で起きた事件は、蝦夷地国内化に向けた転換点になったと同時に、長きにわたって続いたチャンを中心としたアイヌ社会の終焉を招くことになったのです。

幕末に会津藩士が灯した産業の火は、こうしてかたちを変えて、近代という新たな時代に強い光を放った。そして現代にいたるまで、鮭は人々をつなぎ、まちに力を与える存在であり続けている。



藤野缶詰所標津工場でのホタテ缶詰生産
(黒沢正義氏提供)



藤野缶詰所は標津以降、根室や国後島、択捉島、朝鮮にも缶詰所を設置していた。この出荷用木箱には「根室藤野缶詰所製造」とある。年代は不明。入っている缶詰はレブリカ
(別海町郷土資料館 所蔵)



が、札幌からの距離の問題などで石狩が優先されたという。翌1878（明治11）年、西別川河口に「別海缶詰所」を開業。その後、厚岸、択捉島の紗那と立て続けに根室海峡沿岸に工場が作られていった。

缶詰所は根室の有力な漁場持ち・藤野辰次郎に払い下げられ「別海藤野缶詰所」となる。明治20～30年代は日清・日露戦争により、軍用として缶詰の需要が高まっていた。藤野は標津にも工場をつくり、昭和に入るとは標津がメイン工場となっていた。藤野以外にも、根室では酒造業の碓氷勝三郎らも缶詰工場を設け、缶詰製造業は根室海峡沿岸を代表する産業となった。缶詰によってそれぞれのまちは発展し、昭和初期まで日本の漁業や貿易に大きな影響を与えていたのである。

開拓使別海缶詰所物語



別海缶詰所開所式の様子（1878年）
（北海道大学附属図書館蔵）

1878（明治11）年、開拓使は別海村の西別川河口（現別海町本別海）に缶詰所を設置しました。ほとんどの日本人が、缶詰が一体何なのか分からない時代のことです。別海の缶詰所は、前年の石狩缶詰所に次いで作られました。開拓使の本命は別海でした。江戸時代から將軍家に献上され、味が抜群な西別川産の鮭を缶詰にすれば、外貨をかせぐことができ、北海道の定住者も増えると考えたのです。

工場に掲げられた星印の旗は開拓使の記章で、北極星を表すこの星印は、民営化後も長く、ブランドデザインとして缶詰ラベルに使われました。この星印は、同じく開拓使の事業に起源をもつサッポロビールの商標として使われています。

トリートとスウェットというふたりのアメリカ人が招かれ、缶詰製造の指導に当たりました。缶詰所には生徒舎が併設され、全国から集められた缶詰生徒が、缶詰の製造を学

びました。

缶詰はひとつひとつ手作りで作られました。缶に木製の定規で切りそろえた鮭を入れてフタをハンダ付けし、お湯で1時間半煮て缶に穴をあけて空気を出し、穴をハンダ付けした後、さらに2時間煮て出来上がりです。

ところが当初缶詰は全然売れませんでした。高価だったのと、宣伝不足が原因でした。別海缶詰所は廃業の危機を迎えます。しかしフランスから大量の注文が突然舞い込み、一気に息を吹き返し、廃止されていた択捉島の缶詰所を再開するほどでした。

1987（明治20）年に、官設缶詰所は民営化され、藤野缶詰所となりました。日清・日露戦争後、兵士たちを通じて缶詰のよさが国民に広まっていきました。標津や根室にも次々と缶詰工場が作られ、缶詰業は根室地方繁栄の屋台骨となっていきました。

戦後、別海缶詰所の建物は中学校に転用され、現在も別海漁協の倉庫として使われています。



別海缶詰所缶詰ラベル（1883年頃）
（北海道立文書館蔵）

ラクスマンと高田屋嘉兵衛にみる初期の日口交渉史



ラクスマンらが乗ってきたエカテリナ号を描いた「俄羅斯船之圖」

1792年にアダム・ラクスマンをはじめとするロシア人が根室地方に来航しました。ラクスマンらは大黒屋光太夫ら日本人漂流民3名を伴っており、漂流民送還や日本との交易交渉を目的としていました。こうした外交上の重要な事項は、当時この地域にいた松前藩の役人では判断できず、幕府の回答を待つ間の約8ヶ月間、ラクスマンらは現在の根室港に滞在し越冬することになりました。大黒屋光太夫は約10年に渡る漂流生活で、ロシア語をはじめロシア文化を身につけていました。また松前藩氏は、根室で越冬するロシア人の生活の様子を細かく絵図や文字で記録しました。ラクスマンらが乗ってきた船や船長の絵図、ロシア人が建てた小屋の内部の様子やロシア人の所持していた道具類など、その内容は多岐に渡ります。その中にはロシア人が使用しているスケートやティーセットの様子を描いたものがありました。スケートも紅茶も現在の私たちにとって身近なものです。ラクスマン来航時、根室において初めて記録されたものと考えられています。当時、ロシア文化に関する知識はほとんど知られておらず、こうした記録は当時海外情勢に関心のある藩主や知識人の間に広がり、その後の洋学の発展に大きく寄与しました。

ラクスマン来航から14年後の1806年、根室港を望む地に社が創祀されます。現在の根室金刀比羅神社の前身となるこの社は、当時

根室地方の場所請負人であった高田屋嘉兵衛が創祀したものです。択捉航路開拓など、嘉兵衛がこの地域の漁場整備に尽力していた当時、日口関係は緊張状態にありました。1811年には、国後島の泊湾周辺で測量をしていたディアナ号艦長のゴローニンが松前藩に逮捕される事件が起こります。翌1812年にはディアナ号副艦長のリコルドが、ゴローニンの所在について情報収集するため、国後島沖で嘉兵衛を拿捕しカムチャツカ半島まで連行します。そしてこの時、リコルドと嘉兵衛の間で、ゴローニン解放に向けた協力体制が生まれます。1813年に嘉兵衛がロシアと松前藩の間をとりもち、ゴローニン解放を果たすのです。この一連の出来事は、民間人が外交問題を収めた一件であり、日口外交史上重要な歴史として語り継がれています。

嘉兵衛が創祀した根室金刀比羅神社は長きにわたり、この地域の海上安全と豊漁を願う拠り所となってきました。1888年から続く根室金刀比羅神社例大祭は、全市をあげて開催される盛大なものであり、神社と地域の



現在の「金刀比羅神社」
（根室市）

海に、大地に、 人々の挑戦は続く



昭和30年代の鮭漁の様子
(福沢英雄氏撮影)

不漁に耐える

それまで天然の鮭に頼ってきた漁業だが、明治30年代以降は次第に資源が枯渇し、沿岸部では漁師が副業に畜産を行う半農半漁の暮らしがみられるようになった。『標津町史』にはこんな記述がある。

「大正二年以降は、大正十、十二年の豊漁をのぞいて不漁の連続であり、漁業不振のどん底であった。その日の生活にもこと欠く者が続出し、親子心中の噂もあり、宮田岩松漁場主が発狂したと噂されたのもこの頃である」

鮭漁の不振は人々を心中にま

で追い込んでいたのだ。漁業資源の強化、開拓が求められ、1891（明治24）年、西別川に初めて建設された人工ふ化場は、翌年には標津川、羅臼川、忠類川にもそれぞれ施設が完成した。根室海峡沿岸部は北海道でもっとも早くふ化事業体制が整った地域となる。ただしその

成果が実を結び、鮭の来遊数が急激に増えるのは1970年代になってからのこと。それまでは長く不振にあえぎ、鮭を補うように、ホタテや昆布、ホツカイシマエビなどが盛んに水揚げされるようになった。碓氷勝三郎の缶詰工場では、それまで技術的に難しかったエビ、カニの缶詰開発に成功し、鮭鱒に代わる新たな資源を開拓した。これらの漁は現在の根室海峡沿岸の、鮭と並ぶ水産物へと成長し、野付湾でホツカイシマエビ漁を行う打瀬舟は春と秋の風物詩ともなっている。

さらにこのころ設立された標津村茶志骨漁業組合では、凶漁対策のために漁具の改善などとともに仔馬の飼育を推奨。日清・日露戦争をきっかけに高騰した馬は貴重な現金収入となり、漁師たちの生活を支えた。牛の飼

育も積極的に行われ、碓氷、藤野の缶詰工場でも原料の鮭・鱒が減少したことから、エビやカニの缶詰開発に着手したほか、大規模な牧場経営にも乗り出している。また、鮭、鱒、ニシンの漁業経営を目指してやって来た移住者が畜産業に転身した例も多いという。

根釧原野、酪農の幕開け

資金のある漁業家による牧場創設が相次ぐ一方、内陸部の開発はなかなか進まなかった。その理由の一つに、1886（明治19）年から和田村（現根室市）に入植した屯田兵の失敗がある。屯田兵440戸が入植して大農村を作ったものの、農業経験がない士族集団であったことや、森林が濃霧発生の原因だと誤って木を伐採し、海霧や



昭和30年前後の野付半島での放牧風景（福沢英雄氏撮影）



標津線全線開通した昭和12年10月30日の根室標津駅



根釧台地の殖民軌道関連資産群(別海町)



初期内陸交通網駅通制にまつわる
旧奥行白駅通所(別海町)



今では日本一の酪農地帯となった根釧台地



根釧台地を空から見ると、大地に幅180メートルある林帯によって構成された巨大な緑のグリッドが広がっている。これは「格子状防風林」と呼ばれ、明治時代に計画された殖民区画の名残として、開拓の進展によって地上に姿を現わした。



旧北海道農事試験場根室支場(中標津町)

強風の害が多かったことなどが重なり、「根室地方は農業に適さない」という誤信が広がってしまったのだ。しかし、その後の調査で農耕適地であることがわかり、1910(明治43)年、別海村中春別地区には北海道庁根室農事試験場が設置された。標津村内陸部(現中標津町)で本格的な農業開拓が始まったのもこのころで、1911(明治44)年、徳島県民と静岡県民によって構成された「徳静団体」13戸が移住している。しかし当

初は穀類と豆類を中心とした農業が行われたため、冷害や濃霧の被害が大きかった。人々の暮らしを安定させるため導入されたのが、漁業者の副業として採用されていた畜産農業であった。村は入殖者に乳牛の飼育、木炭窯の改良、農機具の購入を奨励。1922(大正11)年には道費2割の補助を受けて乳牛120頭を導入し、村の希望者に売り渡しを行った。こうした流れを受けて徐々に乳牛の飼育が広まり始める。

1925(大正14)年に「中標津の酪農のパイオニア」とよばれる後藤卓三が初めて集乳所を開設すると、それまで乳をしぼっても売るすべがなかった人々が遠くからも生乳を搬入するようになった。また、1924(大正13)年に厚床―中標津間に日本初の殖民軌道が開通。未整備だった原野を多くの人と物資が移動できるようになった。こうした大正期には多くの移住者があつたものの、たび重なる

冷害凶作により、その3分の2が離農するほどの厳しい状況が続いていた。それをなんとか持ちこたえられたのは、関東大震災の罹災者救済と、北海道開拓の労働力確保のため国の救済措置があつたことが大きい。1927(昭和2)年に国費によつて北海道農事試験場根室支場(のちの「伝成館」)が建設されると、当時めずらしかったコンクリート造りの立派な建物を見てこの地に移住を決めた人もいたという。しかし、原野の開拓は簡単には進まない。1931(昭和6)年の冷害凶作、1932(昭和7)年の大晩霜被害により壊滅的な打撃を受ける。北海道議会では根釧原野開放棄論が主張されるほどで、移住者からは転住請願、ムシロ旗を立てての村民大会が相次ぎ社会的にも大

きな騒動となった。

移住者による命がけの陳情の末、北海道は「根釧原野開発5カ年計画」を策定し、「自力再生」をスローガンに掲げて

1933(昭和8)年から計画を実施。この計画により根釧原野は酪農業へと大きく転換が図られる。とはいえ、酪農王国といわれるようになるまでには、

昭和30年代から着手される国営パイロット事業をはじめ、まだまだ多くの挑戦が続く。

含めて多くの労働集約が求められる、漁期には多くの労働力を外から招き入れる必要があつた。標津線はまだ秋鮭不漁だった開通当時から、遠く青森から来る出稼ぎ労働者たちを乗せて走っていた。1970年代から鮭漁が復活し、前年比2倍の漁獲量更新を繰り返すようになる。と、出稼ぎ労働者たちの往来はさらに活発になっていく。もちろん、水揚げ後塩漬け加工した大量の鮭も標津駅から貨物列車で全国へ向けて出荷されていた。

沿岸で発展した漁業、内陸で進められた農業、そのどちらにも欠かせないのが交通だ。標津や別海、斜里には多くの駅通所が置かれ、そのなかの一つ、別海町で唯一保存されているのが「旧奥行白(おくゆきうす)駅通所」だ。このほか奥行白地区には国鉄・標津線「旧奥行白駅」、別海村営軌道「旧奥行白停留所」という3つの時代の交通遺産が保存されている。

1937(昭和12)年に全線開通した国鉄・標津線は、根室海峡の鮭へとつながる道として多くの人の往来を促した。鮭漁は網入れから水揚げ、加工も

また、昭和30年代には近代酪農のスタートとなる根釧パイロットファームへの入殖者を乗せ、昭和40年代以降は北海道観光ブームに魅せられた多くの観光客を乗せたが、1989(平成元)年、惜しまれながらも全線廃止となった。

エピソード
8

根室地方の 昆布生産のルーツと 地域芸能



瑠璃獅子神楽

根室市や羅臼町は現在も昆布の生産地として知られています。昆布は鮭とともにこの地域を特徴づける水産品です。

根室の昆布生産の歴史は18世紀半ばまで遡ります。場所請負商人が当地方に進出し、アイヌ民族を労働力とした組織的な昆布生産が開始されたのです。当地の昆布は北前船によって本州方面に流通し、国内需要にこたえるだけでなく、主に中国（清国）への輸出品として重要な産物でした。明治時代以降も昆布生産は続き、場所請負商人が独占していた漁場は解放され、新たに参入する商人も現れ、移民を送り込み漁場の開拓が進むことで生産量も上がっていきました。また、日清・日露戦争後の不景気や凶作などが原因で、明治時代後半より富山県からの移住者が増えますが、既に根室市では漁場開拓が進んでいたこともあり、羅臼町や北方四島方面に昆布漁だけではなく、タラやカレイの漁場も開拓しながら定着していきました。この地域の昆布は現在も、「歯舞昆布」や「羅臼昆布」の名称で全国に知られており、和食でも欠かせない食材となっています。

また富山県から移住してきた人々は出身地の伝統芸能もこの地域に持ち込んでいます。大正2年、現在の根室市瑠璃瑠に富山県黒部市から移住してきた人々は、郷土芸能として瑠璃獅子神楽を伝承し続けています。



根室地方を彩る昆布干しの風景

エピソード
7

野付湾の打瀬網漁と 根室海峡のカニ缶詰



北海道遺産にも選定されている野付湾の打瀬網によるホッケイシマエビ漁

毎年6月中旬～7月中旬と10月中旬～11月上旬、野付湾に三角の帆を掲げた舟の姿をみることができます。野付の風物詩、打瀬網漁法によるホッケイシマエビ漁の姿です。野付湾は水深が浅く、海底にアマモが群生しており、ここに多くのシマエビが生息しています。ここで動力船を使うとスクリーンにアマモが絡まるため、昔ながらの帆船でホッケイシマエビ漁が行われているのです。

野付湾のエビは、自給的な漁としては古くから行われていたと推測されますが、水産品として注目されるのは、明治30年代に入ってからと考えられています。その始まりは碓氷缶詰工場が別海村に新設された際、ホッケイシマエビを原料に缶詰生産に

着手した時からと推測されます。当初缶詰のエビは黒変することから売り物にならず、失敗続きだったそうです。しかし試行錯誤しながら研究を重ね、明治33年（1900）に黒変防止対策として硫酸紙を用いる方法を開発したことで、エビ缶詰の製造に成功しました。この技術は同じく黒変問題を抱えていたカニ缶詰製造に応用され、同時期に同じくカニ缶詰製造に成功していた和泉庄蔵とともに、根室地方のカニ缶詰産業勃興のきっかけとなりました。

明治時代にこの地域で生産された缶詰ラベルには日本語、英語、漢語で商品の解説がされています。カニ缶詰は特に欧米で好まれ、サケ・マス缶詰とともに外貨獲得を担う重要な生産品となったのです。



明治になって根室海峡沿岸には多くの缶詰工場が設けられ、世界に向けて出荷された。缶詰ラベルはカラフルで美しい。当時の缶詰製造会社の一つが根室の酒蔵「碓氷勝三郎商店」

根釧台地の 格子状防風林



明治時代に計画された植民区画の名残として、開拓の進展によって地上に姿を現した「格子状防風林」

根釧台地を空から見下ろすと、格子模様の巨大な防風林が広がっています。

宇宙からも見ることのできるこの防風林は、明治時代に植民区画として設定されたもので、原生林を切り開き、原野を開墾するとともに、農地や人々の生活を守るために180m幅の林帯を3,300m間隔で配置したもので、中標津町、標津町、別海町、標茶町にまたがり、最長直線距離は約27km、総延長は約648kmにもなります。

平成13年には「根釧台地の格子状防風林」として北海道遺産にも選定された、雄大な酪農景観のシンボルです。

防風林の歴史や役割等を以下に整理します。

- 開拓顧問のホーレス・ケブロンらが提唱した区画法に基づき、北海道では基盤の目状に農地や道路、防風林が整備された。
- かつては北海道の他の地域にも設けられたが、どんどん減少した。
- 根釧原野に残る防風林は日本最大規模。
- 防風林は風害による農作物の乾燥や倒伏を防ぐほか、夏には霧を消す効果、冬は風害を受け止め道路の見通しを確保するという役割もある。時に人命を奪うような冬の嵐が発生する根釧台地では、今も防風林

は生活に欠かせないものとなっている。

- 格子状防風林の面積は1万5708haで、約6割が国有林。その50%が、冬になると葉を落とすカラマツで、1年中緑色の葉を持つトドマツや、アカエゾマツは全体の26%。自然そのままの林は19%となっている。
- 現在、カラマツの伐採跡には、生物多様性の観点から、郷土樹種のアカエゾマツやトドマツが植えられるようになってきている。
- カラマツは、寒冷地でも成長が早く、安価で大量に手に入るということで長野県から持ち込まれた。また、当時は炭鉱の坑木としての需要もあった。
- カラマツは枝が落ちてしまうため、酪農家は春になるとまず牧草地に落ちている枝を拾わなければならない。しかも防風林の影になる部分は作物の育ちが悪くなり、ある意味邪魔な存在でもあるのだが、風の影響を受けやすい牧草やデントコーンなどにおいては防風林の効果は非常に大きい。
- 開拓が進み、周囲が牧草地になっても、防風林があることで開拓する前の気候に近い状態を保っている。
- 防風林は動物たちの棲家や移動経路でもあり、生態系維持にも役立っている。

標津線 関連資産群



標津町の転車台

原野開拓の進展に伴い活況を呈した植民軌道でしたが、その輸送量は早い時期から限界を迎えており、鉄道に対する地域住民の願いは次第に盛り上がりを見せてきました。

大正14年、厚床～標津間の鉄道建設について国会で決議され、昭和4年には厚床付近から標津線の測量がはじまりました。当初は海沿いから標津へ向かう「海岸線」が予定されていたのですが、それを知った住民たちは原野を貫くように敷設する「原野線」を主張しました。この問題は、双方主張を譲らず険悪な状態となり、ついには政治問題化し、激しく争われることになりました。しかし、最終的には昭和6年8月、原野を縦断する路線に決定することになりました。

標津線は、昭和8年の厚床～西別の開通を皮切りに、翌9年の西別～中標津、さらに中標津～標津、標茶～計根別、そして昭和12年の計根別～中標津の開通により全線が開通することになりました。このことは昭和6、7年の冷害凶作により打ちひしがれていた原野の開拓農民に新しい希望を与え、経済的にも疲弊していたこの地域に鉄道建設景気をもたらしました。

以降、標津線は、太平洋戦争中における飛行場建設の資材運搬をはじめ、戦後の海外引揚者や服役軍人の輸送、さらに戦後の緊急開拓者の受け入れ、そして昭和30年代には近代酪農の夜明けとなったパイロットファームへ入植者を迎え、そして様々な資材をこの

地方へ運びました。さらにディーゼル化に伴って全盛期を迎え、昭和40年代には知床を含む道東観光ブームで多くの人々を乗せて走りました。しかし、そのブームの終わり頃になると沿線住民の足は列車から車へと変わってしまい、国鉄では赤字問題が深刻化し、標津線の廃止がクローズアップされるようになりました。

開通以降、根釧原野の開発の振興と共に人々の生活と産業、そして心を支え続けてきた標津線は、56年の間、原野開拓の使命をまっとうしてきましたが、道路網の整備とモータリゼーション、航空運輸の進展とともに旅客、貨物輸送が激減したことにより、廃止反対運動もむなしく平成元年4月29日、惜しまれながら廃止に至りました。

廃止から30年を経過した現在は、線路跡、鉄道信号、各地の橋梁、標津町の転車台、静態保存されている各種車両などが残されています。



標津線当幌川橋梁

いまも鮭は暮らしとともに

地域HACCPの先へ

昭和40年代になって人工ふ化事業がついに実を結び、長く不漁が続いていた鮭漁は驚異的な漁獲量を更新し、かつて高級魚だった鮭は日々の食卓に欠かせない大衆食材の一つとなった。

そのなかで、標津町は食の安心・安全を標榜し、2000年に独自の取り組みとして「地域HACCP」を導入する。生産者、加工業者、流通業者が一丸となり、水揚げから卸売、加工、輸送まで一貫した体制を

整えるようになった。これは全国に先駆けて実施された体制で、水産業のみならず各地の食品加工業にも影響を与えた。

鮭をめぐる取り組みはさらに進化を続けている。町の秋鮭漁獲量は1990年代後半から2000年代前半にかけて2万トンに迫る勢いを見せていたが、2008年に約6000トンと激減し、現在まで不漁傾向が続いている。また、ノルウェーやチリ産などの養殖鮭が輸入されて人気が高まるとともに、国内産秋鮭の価格が急

激に下落した。

こうした苦しい状況のなかで、2008年から町と漁協、釧路水産試験場とが共同で独自の活締め技術を研究し、鮮度を長く保つ「船上一本メ」が誕生した。研究では船に持ち込んで自動化する機械も考案されたが、現在は数が少ないため、漁業者が一尾ずつ手作業で鮭の血抜きを行っている。活締めの鮭はイクラや白子も圧倒的に色が良く、鮮度を保って加工ができる。とくに白子はそれまであまり消費されていなかったが、関

東方面を中心に新たな取引が生まれた。

また、より高品質な標津産をアピールするブランド化の動きも進み、2019年に標津産ケイジを「王標(オウヒョウ)」、標津産特大サクラマス「伊茶仁マス(イチヤニマス)」と名づけ、差別化した商品として全国に向けた発信が始まった。別海の「献上西別鮭」、羅臼の「羅皇」、根室の「歯舞紅鮭」「歯舞時不知」と共に、江戸時代の「鱒形拾壹品鮭形四品」が、現代に蘇ろうとしている。



サーモンフィッシングなど鮭は地域のファンを得る素材としても期待。

(上) 別海町を流れる西別川の鮭は、徳川將軍家へも献上された。別海漁協では、江戸時代から続く製法を継承した「山漬け」が生産されている。
(中) 祭りやイベントなど、鮭は暮らしとともにある。
(下) 長い年月をかけ、一尾を使い切る食文化が根付いた。近年は鮭節など新たな加工品も人気を博している。



標津と鮭の多様なつながり

標津町には鮭を漁業資源としてはもちろん、科学的、文化的な視点からとらえる場所がある。1991(平成3)年にオープンした「標津サーモン科学館」は、サケ科魚類や標津の海や川にすむ魚を展示する「水族館」と、鮭の生態や文化を紹介する「博物館」の機能をもち、大学など研究機関との共同研究に力を入れるほか、2012年から漁業関係者ととも町内河川で鮭の自然産卵調査と改善に向けた活動を続けている。

また、町を流れる忠類川では国内初の「サーモンフィッシング河川」としての取り組みが行われ、鮭の遡上時期になる

と全国から釣り愛好者たちが集結するようになった。町の一大イベント「秋あじまつり」には周囲の市町村からも多くの人が詰めかけ、近年は産卵後の鮭を活用した「鮭節」など新しい加工品も生まれ、全国から注目を集める。

人々の暮らしに、鮭は変わらず寄り添い続けている。とくに町民が標津を「鮭のまち」と強く感じるのは、毎年標津漁協から町内世帯へ鮭一尾が贈られる時期だろう。町内の家庭では鮭を手早くさばき、一尾を余すことなくおいしく食べきる。家の軒先に「鮭とば」を干す風景があったり、自家製の「へいくら醬油漬け」や「鮭飯寿司」を自慢し合ったり、やつぱり一番好きなのは「山漬け」とうなずき合ったり、地域の食文化は現在も日常に息づいている。

「アイヌ語地名から考える 鮭の聖地」



「東西蝦夷山川地理取調図十四」
(別海町郷土資料館所蔵)

松浦武四郎が歩いたメナシ

根室管内の目梨郡は、知床半島の南東半分、羅臼町が位置する郡名だ。しかし明治のはじめに松浦武四郎が政府に郡名を建議する以前には、目梨は野付湾のあたりまでをさした、もっと広域の地名だった。幕末の戊午（つちのえうま）の年、1858（安政5）年にアイヌに導かれてこの地を歩いた幕吏であり探検家の武四郎は、『戊午女奈之日誌』の冒頭を、「メナシ、訳て東と云儀也」（アイヌ語のメナシとは東の意味である）、とほじめている。

1858（安政5）年の1月から8月。松浦武四郎は、最後の蝦夷地探検をした。道東に東の海岸線と、十勝や日高、そ

して道東を踏査する長大なもので、記録はのちに『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』としてまとめられる。メナシでの武四郎は、土地ごとのアイヌに導かれて6月上旬には根室を出て根室海峡沿いを北上、知床半島を舟で一周して斜里に出ている。

武四郎は、野付湾をすぎるとコイトイ（現在の茶志骨川河口域）からチウルイ（現・忠類）までに7つのアイヌコタンと番屋がある、と書く。シベツ（標津川）を渡ると、サケ漁の番屋や稲荷の社があるサンポッキ。いまはオホーツク文化の重要な遺跡である三本木遺跡のある土地だ。さらに北に進んでイジヤニ（現・伊茶仁）には100坪以上の番屋を

中心に板蔵8棟、稲荷社、布告の掲示板、井戸などがあり、アイヌの小屋が7棟ある。武四郎はいつものように水系に沿った地名を細かく拾い、各戸の人数や名前、年齢までを詳しく記録している。サハリンや千島から

迫るロシアなどへの備えとして、松前藩から取り上げた蝦夷地を日本の新たな領土にするために取り組んだ、幕吏としての重要な仕事だった。



ワシ・タカの尾羽は貴族や武士にとって近世にはラッコの毛皮と同等の価値がある蝦夷産物だった（根室市教育委員会提供）

武四郎は『女奈之日誌』で標津のことを、「シベヤツの訛り。鮭有る義なり」と書いている。また幕府の

アイヌ語通辞上原熊次郎は、シベツとは大きな川の意味で、この地域でもっと大きな川（主流）だからこの名があると書き残している。このふたつが、シベツの語源をめぐる二説となっている。「サケがいる川」の意味でも「大きな川」でも、標津という地名には、太古から今日に

および、「サケの聖地」としての土地の営みが正確に表されている。

標津川河口に開かれたまち標津には、標津川の北を流れる伊茶仁（いちぢに）川とその支流のポー川に挟まれた台地を中心に、太古の住居跡を意味するおびただしい数の竪穴が残されている。伊茶仁カリカリウス遺跡（縄文期～アイヌ文化期）、古道遺跡（擦文期・アイヌ文化期）、三本木遺跡（続縄文期・オホーツク文化期）という三つの遺跡を中心にした「標津遺跡群」と呼ばれるもので、その数は4400以上。これだけの規模が生まれたのは、とても長いあいだにわたって人々の営みが重ねられたためだ。彼らの暮らしを支えたのはまずサケの資源だった。それを証すように、伊茶仁川の名はアイヌ語のイチヤニ（サケの産卵場）に由来する。

よいよ目前に迫っていた。北千島に進出したロシア人たちは、ラッコの毛皮を税としてアイヌから強制的に徴収するようになる。加えてロシア正教や飲酒の習慣も押しつけた。そして物資の補給のために、日本との接触を求めていく。

さらに風雲急を告げる事態が起こった。1789（寛政元）年。松前藩の請負商人飛騨屋のもとで漁労者となっていたクナシリ島やメナシのアイヌが、暴力的に搾取されるばかりの不満と怒りを爆発させた。「クナシリ・メナシの戦い」だ。この直後の1792（寛政4）年。ロシアの使節アダム・ラクスマンが通商を求めて千島列島を南下してついに根室に来航。日本との通商を求めた。

事態を受けて幕府は、近藤重藏率いる大規模な蝦夷地調査団を派遣。ほどなくして蝦夷地全

メナシは東の入り口

メナシに人間の営みが現れた約1万年前は、最後の氷期（氷河時代）が終わり、一転して温暖化が進んでいた時代。氷期には野付と国後島は陸続きだったが、海水面が上がって根室海峡ができていった。日本列島と朝鮮半島のあいだに対馬海峡が開き、北海道とサハリンのあいだに宗谷海峡が生まれていったのもこの時代に連なる壮大なできごとだ。温かい対馬海流が日本海を北上しはじめると、列島は温暖で湿潤の気候となり、縄文文化と呼ばれる営みが活気づいていった。

『標津町史』（1968年）にはメナシについて、相対的に東方であることを意味するかから特定の土地を指すわけではない、とある。しかし松前藩の勢力が東に延びるにつれて、メ

島を直轄することになる。盛岡、弘前の両藩に警固が命じられ、久保田藩（秋田藩）と鶴岡藩（庄内藩）、そして仙台藩と会津藩にも出兵が命じられた。

幕府の蝦夷地直轄は1821（文政4）年の暮れに終わる。しかし平穏な時代は短かった。歴史の舞台は、日本に近代の扉があく幕末に移っていく。

通商を求めるペリー艦隊の来航（1853年）以降の激震を受けて、幕府は松前領をのぞいて蝦夷地を再び直轄。箱館に出先機関（奉行所）を設けた。会津藩が標津に本陣を置いて警固と開拓の任に当たったことには、こうした歴史の歯車が動いていた。ロシアと結ばれた和親条約（1855年）によって千島列島の領有は、ウルップ島以北がロシア領、エトロフ島以南が日本領と定められた。

ナシは狭められて認識されるようになる。霧多布場所（アイヌとの交易拠点）が設けられた18世紀はじめからは、武四郎が書いたように標津川流域から羅臼がメナシと呼ばれるようになった。松前から見ればメナシは、和人の勢力が及ばない東の奥地を意味した。

しかし本来メナシという地理概念の基盤は、北海道と国後島が構成する根室海峡の両側にあり、現在の標津の地は、さらにそこから北東へと約1200kmにもわたって連なる千島列島への入り口だった。ここは千島に人やモノを送り出していくポンプの役割を果たしていたのだから、メナシは東の果てではなく、東の入り口だったのだ。

元和年間（1615～24）に松前に入ったイエズス会の宣教師の報告書には、毎年メナシのアイヌが百艘もの船を仕立て

これからのメナシの針路は

地名研究家山田秀三（1899～1992）は1987（昭和62）年7月に標津町中央公民館で行った講演で、明治以降のアイヌ文化の研究が道東にたどり着くには時間がかかった、と語っている。山田は、北海道内を歩いている内に、道東を田舎扱いしていたのは西南から入ってきた和人や、彼らと接触した後世の人たちだったらしい、と触れたうえで、もともと古い北海道では、道東も道西もなく、ある場合には道東の方が優位だったらしいと続けている。親友のアイヌ語学者知里真志保から、アイヌ社会には「東方上位」の思想があったことを教わったという。

英語で東方を意味するOrientは、太陽が昇る方を意味する

て松前を訪れ、彼らはきわめて高価なラッコの皮やワシ羽などを持つてくる、とある。ラッコは千島の特産で、メナシのアイヌたちは千島アイヌとの交易でその皮を手に入れていた。同じく千島からもたらされる矢羽根用のワシ・タカの尾羽は古代から本州の貴族や武士にとって憧れの蝦夷産物で、近世にはラッコの毛皮と同等の価値があったという。標津遺跡群にこれだけ長く人々が定住した理由には、なんといつても千島列島との交易が鍵を握っていた。

千島列島のラッコの毛皮は世界最高品質で、18世紀半ばからはじまるロシアの南下は、このラッコを狙ったものだ。松前藩がクナシリ島に場所（交易拠点）を開設したのは1754（宝暦4）年。蝦夷地本島との航路も開かれたが、ロシアの脅威はい

ラテン語の *oriens* に由来する。方針や方向性を意味するオリエンテーションの語源もここにある、中世までヨーロッパの地図の多くは東が上になっていたのだった。また古代中国の神話では、東の海にある扶桑という大木は、空を巡った太陽が休む神木だった。扶桑とは、中国から見て陽が昇る東方にある国で、つまり日本の異称でもあった。ヨーロッパにとっても中国でも、陽が昇る方向である東方は自分たちとは異なる外部にほかならない。一方でそれは、特別な意味や力をもつ場でもあり、そこから「東方上位」という考え方も生まれた。

松浦武四郎や山田秀三が残した文章を地図に、「地域のいま」を主語にしてメナシをあらためて読み解いてみよう。そこから、まちのこれからの針路が見えてくるのではないだろうか。

10万年前	5万年前	1万年前	5000年前	A D 0	500	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
ホモサピエンスがアフリカから世界に向け移動を始める	人類がアメリカ大陸への進出	人類が舟で南方から日本列島到達 日本最古の土器の使用が始まる(青森県大平山元一遺跡)	三内丸山遺跡に大規模集落築かれる	稲作農耕と金属器の使用開始 倭の奴国王が後漢の光武帝から金印紫綬を授かる 邪馬台国の卑弥呼が魏から「親魏倭王」の称号と金印紫綬を賜る	百濟から日本に仏教が伝来する 大化の改新 阿倍比羅夫の北征 白村江の戦い 多賀城・胆沢城・秋田城が築かれ征夷が進行	『枕草子』『源氏物語』が記される 平清盛が実権を握る 平清盛が実権を握る 平氏が滅び源頼朝が鎌倉に幕府を開く	元が二度にわたり日本に攻め寄せる 鎌倉幕府滅亡し室町幕府が成立する	琉球王国建国 応仁の乱 鉄砲やキリスト教が伝来する	信長が足利義昭を追放し室町幕府滅亡 秀吉の天下統一 関ヶ原の戦いの結果家康が江戸に幕府を開く 鎖国完成	ロシア使節レザノフの長崎来航 ロシア使節の『大日本沿海海測全図』完成 アメリカ使節ペリーが浦賀に、ロシア使節プチャーチンが下田に来航し開港を要求する	幕府蝦夷地直轄開始 間宮林蔵の樺太探検 松前藩蝦夷地復領 幕府蝦夷地再直轄 五稜郭建造開始 東北六藩蝦夷地分割統治の開始	松浦武四郎の蝦夷地探検 正式に「北海道」と命名 北海道近代化に向け炭鉱・鉄鋼開発・港湾・鉄道敷設が進む	鮭鱒資源が減少し水産業の多角化が進む 漁家副業としての畜産農業が普及 根室空襲 パイロットファーム事業の開始 鮭鱒資源の回復	水期による海退でサハリンを通じ北海道大陸が陸続きとなり大陸からマンモスやナウマンゾウが移動してくる 人類がサハリン経由で北海道到達 キウス周堤墓群や国宝の中空土偶がつくられる 縄文文化が始まり独自の歴史を歩み始める オホーツク人が北海道オホーツク海岸に進出する 東北地方から北海道西部への人の移住を契機とした 擦文文化誕生 擦文文化の地域性が顕著となり各地に地域集団を形成 土器文化が終焉して擦文文化が終わる チャシクが道内各地で築かれ始める アイヌがサハリンに襲来した元軍と戦う 道南十二館構築 コシヤマインの乱(1457)	水期による海退で根室海峡は陸地化し国後島と陸続きとなる 当地域をマンモスゾウが闊歩する 根室海峡が形成され人類の定住が始まる(伊奈仁カリリウス遺跡) 摩周湖カルデラ形成(約6500年前) 標準遺跡群に大規模集落が形成される 人口の中心が北海道本島から国後島方面に移る オホーツク人が根室海峡に進出し、北千島まで活動範囲を広げる オホーツク人が擦文文化を吸収しヒビタイ文化を開花
ナイル川流域やメソポタミアに国家が形成される	人類がアメリカ大陸への進出	人類が舟で南方から日本列島到達 日本最古の土器の使用が始まる(青森県大平山元一遺跡)	三内丸山遺跡に大規模集落築かれる	稲作農耕と金属器の使用開始 倭の奴国王が後漢の光武帝から金印紫綬を授かる 邪馬台国の卑弥呼が魏から「親魏倭王」の称号と金印紫綬を賜る	百濟から日本に仏教が伝来する 大化の改新 阿倍比羅夫の北征 白村江の戦い 多賀城・胆沢城・秋田城が築かれ征夷が進行	『枕草子』『源氏物語』が記される 平清盛が実権を握る 平清盛が実権を握る 平氏が滅び源頼朝が鎌倉に幕府を開く	元が二度にわたり日本に攻め寄せる 鎌倉幕府滅亡し室町幕府が成立する	琉球王国建国 応仁の乱 鉄砲やキリスト教が伝来する	信長が足利義昭を追放し室町幕府滅亡 秀吉の天下統一 関ヶ原の戦いの結果家康が江戸に幕府を開く 鎖国完成	ロシア使節レザノフの長崎来航 ロシア使節の『大日本沿海海測全図』完成 アメリカ使節ペリーが浦賀に、ロシア使節プチャーチンが下田に来航し開港を要求する	幕府蝦夷地直轄開始 間宮林蔵の樺太探検 松前藩蝦夷地復領 幕府蝦夷地再直轄 五稜郭建造開始 東北六藩蝦夷地分割統治の開始	松浦武四郎の蝦夷地探検 正式に「北海道」と命名 北海道近代化に向け炭鉱・鉄鋼開発・港湾・鉄道敷設が進む	鮭鱒資源が減少し水産業の多角化が進む 漁家副業としての畜産農業が普及 根室空襲 パイロットファーム事業の開始 鮭鱒資源の回復	水期による海退でサハリンを通じ北海道大陸が陸続きとなり大陸からマンモスやナウマンゾウが移動してくる 人類がサハリン経由で北海道到達 キウス周堤墓群や国宝の中空土偶がつくられる 縄文文化が始まり独自の歴史を歩み始める オホーツク人が北海道オホーツク海岸に進出する 東北地方から北海道西部への人の移住を契機とした 擦文文化誕生 擦文文化の地域性が顕著となり各地に地域集団を形成 土器文化が終焉して擦文文化が終わる チャシクが道内各地で築かれ始める アイヌがサハリンに襲来した元軍と戦う 道南十二館構築 コシヤマインの乱(1457)	水期による海退で根室海峡は陸地化し国後島と陸続きとなる 当地域をマンモスゾウが闊歩する 根室海峡が形成され人類の定住が始まる(伊奈仁カリリウス遺跡) 摩周湖カルデラ形成(約6500年前) 標準遺跡群に大規模集落が形成される 人口の中心が北海道本島から国後島方面に移る オホーツク人が根室海峡に進出し、北千島まで活動範囲を広げる オホーツク人が擦文文化を吸収しヒビタイ文化を開花
ホモサピエンスがアフリカから世界に向け移動を始める	人類がアメリカ大陸への進出	人類が舟で南方から日本列島到達 日本最古の土器の使用が始まる(青森県大平山元一遺跡)	三内丸山遺跡に大規模集落築かれる	稲作農耕と金属器の使用開始 倭の奴国王が後漢の光武帝から金印紫綬を授かる 邪馬台国の卑弥呼が魏から「親魏倭王」の称号と金印紫綬を賜る	百濟から日本に仏教が伝来する 大化の改新 阿倍比羅夫の北征 白村江の戦い 多賀城・胆沢城・秋田城が築かれ征夷が進行	『枕草子』『源氏物語』が記される 平清盛が実権を握る 平清盛が実権を握る 平氏が滅び源頼朝が鎌倉に幕府を開く	元が二度にわたり日本に攻め寄せる 鎌倉幕府滅亡し室町幕府が成立する	琉球王国建国 応仁の乱 鉄砲やキリスト教が伝来する	信長が足利義昭を追放し室町幕府滅亡 秀吉の天下統一 関ヶ原の戦いの結果家康が江戸に幕府を開く 鎖国完成	ロシア使節レザノフの長崎来航 ロシア使節の『大日本沿海海測全図』完成 アメリカ使節ペリーが浦賀に、ロシア使節プチャーチンが下田に来航し開港を要求する	幕府蝦夷地直轄開始 間宮林蔵の樺太探検 松前藩蝦夷地復領 幕府蝦夷地再直轄 五稜郭建造開始 東北六藩蝦夷地分割統治の開始	松浦武四郎の蝦夷地探検 正式に「北海道」と命名 北海道近代化に向け炭鉱・鉄鋼開発・港湾・鉄道敷設が進む	鮭鱒資源が減少し水産業の多角化が進む 漁家副業としての畜産農業が普及 根室空襲 パイロットファーム事業の開始 鮭鱒資源の回復	水期による海退でサハリンを通じ北海道大陸が陸続きとなり大陸からマンモスやナウマンゾウが移動してくる 人類がサハリン経由で北海道到達 キウス周堤墓群や国宝の中空土偶がつくられる 縄文文化が始まり独自の歴史を歩み始める オホーツク人が北海道オホーツク海岸に進出する 東北地方から北海道西部への人の移住を契機とした 擦文文化誕生 擦文文化の地域性が顕著となり各地に地域集団を形成 土器文化が終焉して擦文文化が終わる チャシクが道内各地で築かれ始める アイヌがサハリンに襲来した元軍と戦う 道南十二館構築 コシヤマインの乱(1457)	水期による海退で根室海峡は陸地化し国後島と陸続きとなる 当地域をマンモスゾウが闊歩する 根室海峡が形成され人類の定住が始まる(伊奈仁カリリウス遺跡) 摩周湖カルデラ形成(約6500年前) 標準遺跡群に大規模集落が形成される 人口の中心が北海道本島から国後島方面に移る オホーツク人が根室海峡に進出し、北千島まで活動範囲を広げる オホーツク人が擦文文化を吸収しヒビタイ文化を開花
ホモサピエンスがアフリカから世界に向け移動を始める	人類がアメリカ大陸への進出	人類が舟で南方から日本列島到達 日本最古の土器の使用が始まる(青森県大平山元一遺跡)	三内丸山遺跡に大規模集落築かれる	稲作農耕と金属器の使用開始 倭の奴国王が後漢の光武帝から金印紫綬を授かる 邪馬台国の卑弥呼が魏から「親魏倭王」の称号と金印紫綬を賜る	百濟から日本に仏教が伝来する 大化の改新 阿倍比羅夫の北征 白村江の戦い 多賀城・胆沢城・秋田城が築かれ征夷が進行	『枕草子』『源氏物語』が記される 平清盛が実権を握る 平清盛が実権を握る 平氏が滅び源頼朝が鎌倉に幕府を開く	元が二度にわたり日本に攻め寄せる 鎌倉幕府滅亡し室町幕府が成立する	琉球王国建国 応仁の乱 鉄砲やキリスト教が伝来する	信長が足利義昭を追放し室町幕府滅亡 秀吉の天下統一 関ヶ原の戦いの結果家康が江戸に幕府を開く 鎖国完成	ロシア使節レザノフの長崎来航 ロシア使節の『大日本沿海海測全図』完成 アメリカ使節ペリーが浦賀に、ロシア使節プチャーチンが下田に来航し開港を要求する	幕府蝦夷地直轄開始 間宮林蔵の樺太探検 松前藩蝦夷地復領 幕府蝦夷地再直轄 五稜郭建造開始 東北六藩蝦夷地分割統治の開始	松浦武四郎の蝦夷地探検 正式に「北海道」と命名 北海道近代化に向け炭鉱・鉄鋼開発・港湾・鉄道敷設が進む	鮭鱒資源が減少し水産業の多角化が進む 漁家副業としての畜産農業が普及 根室空襲 パイロットファーム事業の開始 鮭鱒資源の回復	水期による海退でサハリンを通じ北海道大陸が陸続きとなり大陸からマンモスやナウマンゾウが移動してくる 人類がサハリン経由で北海道到達 キウス周堤墓群や国宝の中空土偶がつくられる 縄文文化が始まり独自の歴史を歩み始める オホーツク人が北海道オホーツク海岸に進出する 東北地方から北海道西部への人の移住を契機とした 擦文文化誕生 擦文文化の地域性が顕著となり各地に地域集団を形成 土器文化が終焉して擦文文化が終わる チャシクが道内各地で築かれ始める アイヌがサハリンに襲来した元軍と戦う 道南十二館構築 コシヤマインの乱(1457)	水期による海退で根室海峡は陸地化し国後島と陸続きとなる 当地域をマンモスゾウが闊歩する 根室海峡が形成され人類の定住が始まる(伊奈仁カリリウス遺跡) 摩周湖カルデラ形成(約6500年前) 標準遺跡群に大規模集落が形成される 人口の中心が北海道本島から国後島方面に移る オホーツク人が根室海峡に進出し、北千島まで活動範囲を広げる オホーツク人が擦文文化を吸収しヒビタイ文化を開花

鮭が支えた人々の時間、
それは食文化を育んだ時間



この営みを百年先へ
引き継ぐために

執筆者

石田 美恵
柴田 美幸
谷口 雅春
株式会社ノーザンクロス

天方 博章・羅臼町郷土資料館学芸員
石渡 一人・別海町郷土資料館・加賀家文書館学芸員
猪熊 樹人・根室市歴史と自然の資料館学芸員
小野 哲也・標津町ポ一川史跡自然公園学芸員
戸田 博史・別海町教育委員会生涯学習課
山宮 克彦・中標津町郷土館長

令和2年3月31日

発行：標津町教育委員会
北海道標津郡標津町北2条西1丁目1-3
電話：0153-82-3110

地域やまちの歴史と 文化を伝える施設

根室市歴史と自然の資料館

住所：根室市花咲港209

電話：0153-25-3661

別海町郷土資料館・加賀家文書館

住所：別海町別海宮舞町29

電話：0153-75-0802

野付半島ネイチャーセンター

住所：別海町野付63番地

電話：0153-82-1270

中標津町郷土館

住所：中標津町丸山2丁目15番地

電話：0153-72-2190

標津町ポー川史跡自然公園

住所：標津町伊茶仁2784

電話：0153-82-3674

標津サーモン科学館

住所：標津町北1条西6丁目1-1-1

電話：0153-82-1141

羅臼町郷土資料館

住所：羅臼町峯浜町307-1

電話：0153-88-3850

「鮭の聖地」の物語に関するお問合せ先

標津町ポー川史跡自然公園

電話：0153-82-3674